

## 第二十六回

いままでの稼業労働にしても、敵に荷担する行為で、われわれにとっては屈辱そのものだ。この敵に有利になる利敵行為をやるわけにはいかんという強硬意見と、また別に捕まってしまう以上、抵抗したところで無駄、ここは我慢をしようと言う意見もあり、お前はこの期におよんで命が惜しいのかとキャンプ内でも対立が激しくなつた。われわれの体はパン食とはいえ三度、三度食べているので大分回復してきたが、前々からくすぶり続けていた暴動計画までが、一挙に吹き出しそんな険悪な雰囲気になつてきた。

一九四三年（昭和十八年）二月二十五日の朝、稼業合図のラッパが鳴つても、昨夜キャンプ内で決めた通り、二百四十数名の下士官、兵隊、徴用工員が暮舎と暮舎との間の広場に集まつて座り込んだまま動こうとはしなかつた。

フェザーストン捕虜収容所の所長は、英国の士官学校を出た若く血気盛んな新任中尉であつた。自分の後ろへ小銃を持った兵隊を数十人従わせ、一段高くなつた通路に立つて大勢の捕虜たちを見おろしながら、

「私はドイツ戦線にいたが、ドイツ・イタリアの捕虜はわれわれの言つたことをよく聞いた。それに比べて日本兵は命令を守らず全く生意気である。」

と、声を荒げた。

座り込みは仕事のサポータージューズでこれをそそのかした奴がいるはず、キャンプのナンバーワンと話し合いをするからと官騎兵舎が呼び出され、収容所の兵隊四、五名に囲まれるようにしてそのまま拘束、監禁されてしまつた。

「ニュージラランド側は、ボスさえ監禁すれば捕虜たちはおとなしく動く」と簡単に考えていたらしい。

しかし、日本兵のほつは、穩健派もここは心情として彼等の意のままになるわけにはいかない。強硬派とともに座り込みをつついていた。

収容所側は頑強に動こうとしない日本兵に業を煮やし、トイレの屋根や洗面所の屋根などの上に自動小銃を持った兵隊を、四、五人ずつ配置して、われわれを威嚇しはじめた。こつこつと対峙しているわが方の中に、何時入つてきていたのか定かではないが、士官の安達敏夫少尉がいた。

この安達・特務少尉は一九四二年（昭和十七年）十月、ソロモン諸島のサボ島沖海戦で沈

没した巡洋艦「古鷹」の三番砲塔（二十センチ砲二門連装）の砲台長だった沈没後、駆逐艦「初音」に救助された者もいるが、漂流中敵艦に捕まっていた一人だった。この座り込みの中には「古鷹」の部下が七十何人もいて、捕虜の中では最上官であった。

安達少尉は、座り込んでいる全員に、あくまで話し合うのだ、収容所側が何もしないうちに手出しをしなければならないと、大声を張り上げてきつく言い渡していた。

ニュージールランドの将校が、安達少尉にゲイトの方まで来るように言ったが、古鷹の部下たちが安達少尉を取り囲んで行かせようとしなかった。

安達少尉は、宮崎兵曹のように話し合おうとたまされて、拘束されるのを避け、

「話し合いなさい、皆の前でやれ」  
と先方へ叫んだ。

ニュージールランドの副官と将校は安達少尉を逮捕し、柵の外へ連れ出せと兵隊に命じた。座り込むわれわれをかきわけるようにして、兵隊二人が入ってきた。

安達少尉は、所長の副官らしい男が、四十四口径のピストルをこちらへ向けているのを見て、「撃つならおれを撃て！」と大声で叫んだ。

副官は脅しのつもりだったのであるが、安達少尉をはずしてバーンと一発撃った。が、その弾が後ろにいた古鷹の三等機関兵の眉間にあたって、もんどりうって倒れた。

われわれはポケットへ詰め込んでおいた右こころを握って立ち上がり、ニュージールランド兵に向かつて一斉に投げながら、所長や副官めがけて二百四十数人が突進した。

相手は恐ろしくなうて自動小銃をタタタタとぶっ放してきた。

全員伏せた。が、また立ち上がった。

また撃たれてばたばた倒れた。

私は左手首の上をバシとなにかで叩かれたような気がして、その場に立ちすくんだ。後ろから撃ってきた小銃の弾が、前に貫通していた。服に穴があき、冷たいものが腕から滴り落ちるのを感じた。左手の平に血がゆっくりと流れてきたので、持っていたタオルで急いで縛った。

つづく

次回第二十七回は六月八日（火）の予定